

双極Ⅱ型障害における人格的特徴

ー ロールシャッハ・テストによる分析 ー

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
片岡 良子

本研究の目的は、ロールシャッハ・テストを用いて双極Ⅱ型障害の人格的特徴を明らかにすることである。

近年、精神科病院臨床において双極Ⅱ型障害（以下、B PⅡ）が注目されている。この疾患は長引く抑うつエピソードと急速に起こりうる軽躁病エピソードといった気分の変調のために、さまざまな問題をはらんでいるが、病識の乏しさや症状自体の分かりにくさなどのために、確定診断に長期間を要し、治療も長期間に及ぶ。

我が国の伝統的な精神病理学は、疾患の診断とともに病前性格の理解を重視してきた。B PⅡを早期に確定診断するための研究や病前性格についての見解は徐々に明らかにされ、ロールシャッハ・テストなどによる双極性障害のアセスメント研究もなされつつある。確かに、B PⅡに対する診断やアセスメントを同定することは大切ではあるが、より重要なことは、患者が外的世界や情緒的刺激をどのように知覚し把握しようとしているのか、すなわち人格的特徴を理解することではなかろうか。本研究において、精神科クリニックに通院するB PⅡ患者のロールシャッハ反応の比較検討を行った。

第1に軽躁病エピソードを呈する患者（以下、軽躁病群）と抑うつエピソードを呈する患者（以下、抑うつ群）のロールシャッハ反応の比較をおこない、共通する点と差異を検討した。主な共通する点は、①空白反応への反応がみられたこと、②体験型は外拡型傾向が強いこと、③クロッパ法での形態水準の低下がみられたことなどであった。他方、差異は、①反応拒否はみられないが、反応数は軽躁病群が比較的多く反応したこと、②平均初発反応時間は比較的軽躁病群の方が早く反応したこと、③軽躁病群では比較的、動物運動反応や動物反応が多くみられ、抑うつ群では人間運動反応や人間反応が多くみられたことなどであった。但し、殆どの結果にばらつきがみられたことは、注意すべき点である。

第2に本研究と精神病理学的見解との比較を行った。双極Ⅱ型障害の基本気分は「抑うつ」であるが、自己中心的で独創的、慣習に縛られることを嫌い、情緒不安定で興奮しやすく、攻撃性や衝動性が強まるといった共通点はみられるも、行動が合目的的でまとまりがあり、意義のある結果が伴うといった精神病理学的見解には疑問があること、さらに不安を感じることは殆どなく、空虚感が漂っているといった精神病理学的見解にはみられなかった特徴が、ロールシャッハ反応にはみられた。

さらにロールシャッハ反応の先行研究との比較においては、結果と類似している者もいるが、当てはまらない者もいたことから、D S M上診断される双極Ⅱ型障害は、かなり多様なものであることが明らかになった。